31　ジェンナーをめぐる二、三の話題

石田純郎

一九九五年七月に、演者はジェンナーの故郷イギリスのバーケレイを訪れた。その際、見聞・調査した二、三の点について述べる。

一、ジェンナー博物館について

かつてのジェンナー邸は、現在博物館として公開されている。人口一〇万人の田舎町グロスターの南三〇キロメートルのところにあるのが、ジェンナーの故郷バーケレイで、戸数一〇〇軒程度の寒村である。居室四室に、彼に関する展示品が公開され、ビデオ供覧室もある。庭にはジェンナーの小屋（hut）と呼ばれる、彼が貧困者に無料で種痘を施した施設が保存されている他、納屋が故笹川良一氏により国際会議場に改造されている。

四月から九月までは、火曜日から日曜日までの午後のみ、一〇月は日曜日の午後のみ、一般公開されている。一一月から三月までは、休館である。

なお、グロスターの町の大聖堂内にジェンナーの立像がある。

二、一八世紀末のイギリスの僻地における外科医の社会的地位について

バーケレイは、イングランドの西端の寒村である。そうした寒村で開業していたジェンナーの外科医としての社会的地位を再検討する。

十八世紀末までの外科医は、内科医とその職業教育方法はおろか、本人および患者の社会的地位も異なっていた。ジェンナーは、一三歳の時、南二〇キロメートルのところにある隣村の外科医兼薬屋に師事し、徒弟奉公で外科術を修得したあと、二〇歳でロンドンに出て、外科医で解剖学者のジョン・ハンターの解剖学校で、医学の勉強を続けた。二三歳で故郷に帰り、そこで外科医として、生涯開業した。

バーケレイのセベルン河をはさんでの向岸（西二〇キロメートル）に、小都市チェプストウがある。この町の十七世紀か

ら十九世紀後半までの全医療職の名前と職種を列記したリストを入手した。それを分析し、下記のような結論を得た。

この町において、軽外科医療を担当していた理髪師は一七三三年に、理髪外科医も一六六六年に姿を消した。十八世紀中の内科系の医療は薬屋によってなされていた。最初の徒弟外科医の出現は一七四四年で、国家の公認した最初の外科医（Member of the Royal College of Surgeons）の出現は一八一六年である。外科医と薬屋の最初の二重有資格者の出現は一七九三年で、最初のＭＲＣＳと国家の公認した薬屋の免許保持者ＬＳＡ（Licentiate of the Society of Apothecaries）の出現は一八一六年で、初の定住ＭＤ（大学を卒業した内科医）の出現は、一七九八年である。

ジェンナーが開業外科医として活躍していた十八世紀後半は、イングランドの僻地では、徒弟外科医の時代であり、内科医（ＭＤ）や、近代的な二重、三重有資格医療者はまだ存在しない時代であった。

大学で学問としての医学を学んだ内科医と異なり、外科医は外科医親方のもとで、徒弟奉公で外科技術を修得することが普通であった当時、彼は最初の科学的外科医と言われるハンターに教育を受けた。このことが、彼に新しい技術である牛痘の開発という冒険をさせ、それを論文として公表させた可能性がある。

（新見女子短期大学）